

オープン キャンパス 2019 報告

8/4(日)、8/5(月)、8/19(月)、11/3(日) (4日間合計671名が来場) にオープンキャンパス2019を開催しました。今年は例年よりも多い全4回の開催となり、体験学習や特別講義、桜蓮祭でのスタンプラリーなど充実したプログラムとなり、大盛況のうちに終えることができました。



2019 年度エジプト看護管理者研修を終えて

国際交流委員会委員長 樺澤 三奈子

9月末から8日間にわたり、エジプト看護管理者研修(新潟プログラム)が開催されました。この研修は、エジプト・日本両政府による「エジプト・日本教育パートナーシップ(EJEP)」事業の一環として行われ、エジプトの看護管理者10名が東京、大阪、新潟、長野で日本における看護管理を学ぶものです。本学は、研修を受託した佐久大学の協力校として新潟プログラムを運営しました。

新潟プログラムは本学のよさこいサークル主催による歓迎会から始まりました。研修生は、学部授業「看護管理」への参加、新潟県立中央病院・上越地域医療センター病院での病院研修、上越市母子保健事業・こどもセンター事業の見学を通じて、医療・保健サービスにおける

看護管理の考え方と実際を学びました。

研修生は、地方都市であっても大都市と同等の医療・保健サービスの質が担保されていることに驚き、目的で綿密な看護管理を参考にしたいと話していました。また、本学や研修施設での歓迎と研修への手厚いサポートに対する感謝の言葉が多く寄せられました。

この研修では、国や言語、宗教、文化の壁を超え、互いを理解することであたたかな交流が生まれる楽しさと、よりよい看護を探究し合うことの楽しさを経験しました。研修生が、学びをもとにエジプトに根づく看護管理の改善策を実践されることを願っています。



よさこいサークル&4年次生有志による Welcome Event



看護師長業務に関する Shadow Learning (新潟県立中央病院)



学部授業「看護管理」への参加

新潟県立看護大学
Niigata College of Nursing

〒943-0147 新潟県上越市新南町240番地
Tel 025-526-2811 Fax 025-526-2815 E-mail soumu@niigata-cn.ac.jp
<http://www.niigata-cn.ac.jp/>

編集
後記

学生の笑顔が多い今号はいかがでしたでしょうか。カメラを向けると、決めポーズ付きの笑顔が返ってくるので、どの写真を選ぶか迷いました。楽しく学べるって、いいですね。今号は、「学生アンケート」はお休みしましたが、特別な企画を準備中です。次号もお楽しみに。

川野、後田、大倉、石岡

発行日：2020年1月10日



PORTICO
Niigata College of Nursing
新潟県立看護大学ニュース
ポルティコの広場
vol.36
2020.1

実習の感想 ~1年・2年・3年・4年~	P2
専門ゼミナールの学び	P3
研究室訪問 自然科学領域(生物・医学) 教授 境原三津夫先生	P4
学生活動報告~桜蓮祭~	P6
看護系大学 タスクフォースの活動紹介 令和元年度地域課題研究活動発表会の報告	P7
2019オープンキャンパス報告 2019年度エジプト看護管理者研修報告	P8

実習感想



1年

ふれあい実習を終えて

私たち1学年は3日間、上越の3地区に分かれてふれあい実習を行いました。訪問させていただいた地区は、自動車がなくて病院や買い物に行けないという場所で、一見すると不便な地域ではないかと考えました。しかし、お話を伺い、毎日畑を手入れしたり、お米を育てたり、山菜を採りに行ったりと自然豊かな地域だからこそできることを生きがいにおられて、これがこの地域の方々の元気の源であるのだと思いました。また、近所の友達と食べ物を持ち寄ってお話することが何よりの楽しみであるという話も聞いて、人と人とのつながりが深い素敵な地域だなと思いました。医療に

関するお話では、医療従事者に1番何を求めますかという質問をすると、積極的に話しかけて欲しいと言われておられました。過去に病院に行ったとき、看護師さんからあまり話しかけられることがなく、何を行おうとしているのか不安もあったし、居心地の悪い時間を過ごした経験があったそうです。私たちは、患者さんが求める医療従事者となれるよう努力することが大切だと思いました。ふれあい実習ではとても有意義な時間を過ごすことができました。今回学んだ多くのことをこれから医療従事者を目指す上で生かしていきたいと思います。



2年

基礎看護学実習Ⅱを終えて

私は、基礎看護学実習Ⅱで初めて患者さんを受け持たせていただきました。1年生の実習時とは違った緊張感がありました。実習前、患者さんは認知症であるということもあり、無事に実習を行えるか不安が募りました。しかし、実際に患者さんと対面した時にはその緊張も和らぎ、普段の調子でお話することができました。私は患者さんに対して先入観を持っていたことに気づき、専門職を目指す上での心構えがきちんと出来ていなかったと知ることが出来ました。このことは今

後の学習に大きく影響する良い学びだったと思います。

また、今回の実習では患者さんに対しケアを素早く行うことが出来ず、失敗してしまったと感じました。患者さんへのケアは初めてではありましたが、少し実習に対する事前準備が甘かったと感じました。今一度学んだことを復習し、ケア技術の習得に力を入れて取り組んでいきたいです。



3年

子どもの家族への看護

小児看護学実習で、入院する子どものお母さんの精神状態や身体状態から、家族への看護の重要性を学びました。入院する子どもに付き添う親は、子どもが疾患をもち入院していることに不安を感じ、自分のことは後回しで子どものサポートをしていました。入院によって、子どもにとってはもちろん、家族にとっても不慣れな環境で過ごすため、ストレスを感じやすくなると考えられます。これらのことから、疲労がお母

さんの精神状態や身体状態に影響を与えていました。

子どもにとって、家族の存在はとても重要です。家族が健康であることは、子どもにも良い影響をもたらすと考えられます。入院している子どもと一緒に家族にも関心を持ち、家族がどのような状態かを想像しながら関わり、家族も安楽に過ごせるように環境調整していくことが重要であると学びました。



4年

住民の方々との関わりを通して

私は地域看護学の総合実習で、前年度から継続して同一地域の住民の方々とともに地区の健康課題や強み、解決策を考える活動を行いました。

実際に歩いて地区の様子や日中の活動の観察を行う「地区踏査」を行い、住民の方々の地域での過ごし方や交通手段を把握することで地域の特性や課題を知ることができました。

家庭訪問では、地区の全家庭を訪問し、去年に引き続き健康や生活についてのお話を聞かせていただきました。地域の住民同士が家の事情を把握していたり、家にいる時間帯を知っているという話があり、人とのつながりを感じることができ、支えあって暮らしていることだとわかりました。また、進学や就職のために家を離れるなど前年と比較して家族構成が

変化している際には、その役割の変化や生活状況がどのように変わったかを把握することが必要だと考えました。

座談会では、地域の住民の方々に集まっていただき、地区の健康課題やその解決のための話し合いを行いました。学生が一方的に問題を考え、計画を立てるのではなく、住民の方々が主体的に考えていくことで地域の見えない問題や実際に生活していて感じている率直な意見を聞くことができると考えました。また、住民の方々同士で話し合うことで自身の暮らす地域の課題について向き合うことができたと思います。

この実習を通して一人一人の個人の健康状態から地域の健康状態を知ることにつなげることを実感できました。

専門ゼミナールの学び

今回は、1年間を通しての学びや、後輩に伝えたいことなどをお聞きました。老年看護学の皆様、河原畑先生ゼミの皆様にご協力いただきました！

専門ゼミナールでの学び



4年

私は老年ゼミナールに所属しています。大学入学時より救急・集中治療領域に興味があり、総合実習においても同領域で実習しました。この実習を通して、この領域においても高齢者を対象とすることが多く、高齢社会を実感しました。そこで私は、救急、集中治療領域における高齢患者の代理意思決定支援に関して研究しました。

はじめに研究計画書を作成しました。明らかにしたいことに関しての先行研究が少ないテーマだったため、文献検討とインタビューによる研究を2段階で行いました。文献検討で得られた結果をもとにインタビューを行うため、文献検討を早急に進めなければならず、就職活動との両立が大変でした。文献からコードを抽出する過程では何度も精査することに苦労しましたが、ゼミの先生方が真剣に向き合ってください、インタビューにつなげることができました。

インタビューの際も参考文献の研究者の方にお話をお聞きして現状を理解することができ、卒業研究に限らず自身の看護に生かせる学びを得ることができました。このように、卒業研究はこれまでの実習や興味があることを深く学べる機会でもありました。

また、同じゼミメンバーと飲み会を行ったり、話し合うことで辛さを分かち合い、乗り切ることができたと思います。サポートしてくださった先生方と友人には感謝いたします。この専門ゼミナールでの学びを働いていく際にも生かしていきたいと思います。

私が真の看護師になるために必要な看護研究



4年

私は、将来高齢者の看護に携わりたいと考えていたため、老年ゼミでの研究を選択しました。ですが、初めての看護研究、自分は何を問題と考え、何を明らかにしたいのか、テーマが決められません。「高齢者うつ」、「セロトニン」、「腸内環境」…ボンヤリとしたキーワードだけを持って老年ゼミの先生に相談している中、先生の善導により、今すべき研究はそれらに関連したことではないことに気付かされました。将来看護師になる自分自身にとって、どうしても途中で解決すべき課題が見えてきたのです。そして、これまでの実習における自己の看護援助を振り返り、患者－看護師関係の構築を妨げる自分自身の援助の特徴や傾向、課題を明らかにすることを目的として研究を進めていきました。

プロセスレコードを用い、自己の援助を振り返り、無意識下で行われている自分自身のその時その時の感情や思考、行動などを分析していくわけですから大変な作業でした。

初めは自分のための研究では、世の看護への貢献ととならないのではないかと心配しましたが、今後私自身が良い看護を提供していくことがすでに貢献なのだとゼミの先生に言われたことが励みとなりました。

後輩の皆さんには、日頃の授業や演習、実習の中でどんなことでもよいので疑問を持つよう意識することをお勧めします。その疑問がこれからの看護に大きく貢献する看護研究につながるかもしれません。

河原畑ゼミの3人で研究を進めてきました。



老年ゼミ全員でもゼミ室にて、意見交換をしています！！

研究室訪問

境原研究室

**5回目となる「研究室訪問」を祝して、いつも以上に、先生の魅力に迫ります。
今回はこの方、境原三津夫先生です。
学部の1・2年生と4年生で助産師課程を選択している人はおなじみですね。
今号は境原研究室におじゃましました。**



大学の先生は「教育」「研究」「大学運営」「社会貢献」の仕事があるそうです。境原先生がどんなことをされているかレポートします。
まずは「教育」です。大学の先生と言ったら、やはり授業ですよね。境原先生は学部と大学院の科目を担当されています。大学院の授業ってどんなことをされているんですか？

大学院の授業は5～6人の少人数で行われます。学生は自分の研究テーマをもっていますので、その研究テーマに関して臨床医の立場からディスカッションを通してアドバイスをしています。修士論文や博士論文の指導はマンツーマンの指導になります。研究計画書の作成から論文の完成まで、大体1～2週間に1回くらいのペースでディスカッションとアドバイスをしています。論文の完成は、研究者としてのスタート地点に立つということですので、大学院修了後も研究を継続していけるよう指導しています。

うーん。研究計画書や論文を書くって、大変なのでしょうね。マンツーマンということは…授業中はちょっとウトウト…できないですね(;-_-;)。いや、もちろん寝ませんよ。だけど、学部の学生さんたちに、先生の講義を楽しく受けるためのコツとか教えてもらえると嬉しいです。

私の授業は病気のメカニズムを理解することですので、結構頭を使います。医学の進歩は著しいので、毎回の講義の前に最新の医学情報をネットでチェックしています。昨日までの常識が、今日の非常識になっていることがありますので…。

講義の時は、学生の知識欲を満たすために「ここからはハイレベル」と宣言して、医学部レベルの内容を話すこともあります。それでも学生は結構ついてきますね。それと、私の授業は国家試験に直結しますので「はい、これ暗記」や「はい、これ国試に出ていた」と重要なところは強調してメリハリをつけています。このフレーズを使うと学生の顔が一斉にあがるのですが、多用すると効果がなくなるので「ここぞ」というときに使っています。それと、医療現場の実話を紹介するときも学生の顔があがりますね。やはり現場の話は迫力があるのでしょう。

知識欲、たくさん持ちたいと思います。それに、現場の話は、たしかに聞き入ってしまいますよね。
また、境原先生は専門の産婦人科以外の科目で、基礎ゼミも担当されています。今回、水族館で行われたゼミに密着してきました。

基礎ゼミってどんな科目？

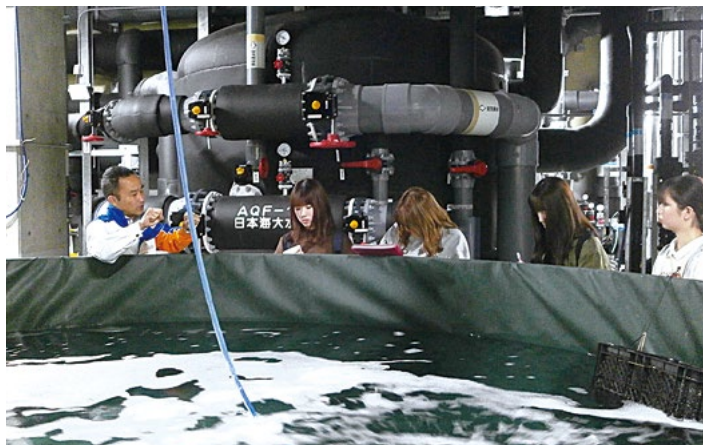
基礎ゼミは1年生の必修科目。境原先生のゼミでは「命について考える」がテーマ。
以前はウニの受精実験を行っていたそうですが、現在は、ゼミのフィールドとして上越市立水族博物館「うみがたり」を利用させてもらっているそうです。境原先生は、いろいろな人と交流するという点においても、将来の看護師の仕事につながるのではないかと考えて、ゼミ内容を構成しているそうです。

当日のゼミは、最初にイルカショーを見ました。「うみがたり」といえば、ドルフィンパフォーマンスですね。この日もかわいいイルカたちのショーを見てきました。イルカがジャンプしたり、尾びれを振っている様子を、かわい〜ね!!と見つ、イルカたちにとってこの生活は幸せなのか？ということも考えます。

イルカショーの後は「うみがたり」の館長に専門的な知識を教えてくださいました。
ゼミの様子は、こんな感じでした。



突然ですが、皆さんは「水族館の3つの“じ”」って何のことかわかりますか？答えは、「掃除（そうじ）」「調餌（ちょうじ）」「給仕（きゅうじ）」だそうです。バックヤード見学では、調餌室（ちょうじしつ：えさの調理をする部屋）や治療室を見学しました。



調餌室の扉の前には、消毒液がおかれていました。調餌室に入ることができるスタッフの方々は限られており、入るときには長靴の消毒をしていました。また、イルカの体調観察の仕方をはじめ、同じ水の中で生きる生物でも、イルカなどの哺乳類と淡水魚と海水魚では薬の飲ませ方が違う等の水族館の健康管理を勉強しました。

学生の質問が多すぎて、アツという間に閉館時間となり、この日にできなかった質問は後日聞くことになるほど、熱心に活動していました。その間の境原先生は・・・にこやかに学生たちを見守っていました。今後のゼミでは、水族博物館に行きたくくなるようなリーフレットを作成するそうです。※私もちょっとだけゼミに参加させてもらったので、どんなリーフレットが出来上がるか楽しみです。

続いては、「研究」です。境原先生が医学部にいらした若い頃は、年間2本の論文発表が暗黙のノルマとなっていて、4本書くと褒められて、0本だと首が飛ぶと言われていたそうです。・・・論文書かないとクビなんですね。怖いですが、でも、そもそも研究って何が面白いのか、聞いてみました。

研究のおもしろさ、醍醐味は、自分の仮説が証明されることです。看護大での研究でワクワクしたのは「満ち潮の時に分娩が多い」という助産師アルアルを証明しようとしたときです。太平洋側と日本海側で調査を行いました。分析の結果、満ち潮の時に分娩が多いということはなかったのですが、どうも満ち潮の時に分娩が始まる人が多いことに気付きました。しかしながら、その後の統計解析の結果では、分娩の開始も満ち潮や引き潮に関係ありませんでした。ただ、潮位が高い時に有意に分娩が始まるという結果がでましたので、もしかしたら、月の引力や気圧などが関係しているのかもしれない。研究はこの「ワクワク感」を味わうことができるのが魅力ですかね・・・多分、脳内麻薬がでているのだと思います。(^_^)

話を聞いていると、研究って、がっかりしたり気持ちが上がったり、試行錯誤がつきものなのですね。脳内麻薬って、研究は中毒性があるのでしょうか？あと、大学の先生は「その日は学会発表だから大学にいないよ～」とかよく言われますが、学会って何ですか？

私が会員となっている「日本産科婦人科学会」を例に説明すると、産婦人科を専門とする臨床医や産婦人科に関する研究を行っている研究者が会員となって作っている組織のことをいいます。診療のガイドラインを作成したり、研究の発表の場としての学術集会を開催したり、日本の産科婦人科学の臨床と研究の最先端を担う組織です。学術集会では最先端の研究の発表をはじめ、教育講演も数多く開催され最新の知識を得ることができます。上越のような地方にいても、学会に出席することにより、最新の知識を得ることができ、また第一線で活躍している臨床医や研究者と情報交換を行うことができるので、大学教員は複数の学会に入っていることが多いです。私は他にも、「日本セーフティプロモーション学会」、「日本母性衛生学会」、「日本フォレンジック看護学会」などに所属しています。

いろんな学会があるんですね。次は「大学運営」です。先生は、副理事長でもありますよね。副理事長ってどんなことをしているんですか。それから、先生たちってよく会議していますよね。月に何回くらいあるんですか？

会議は月に15回くらいだと思います。会議と会議、会議と講義のダブル・ブッキングが起ころないように調整するのは、結構大変です。副理事長の仕事は、大学の運営面で理事長（学長）を補佐することです。この大学は平成25年に法人化されましたので…

（境原先生はいろいろとお話されていたのですが…すみません、ついでにいけません。と、ということで、略させていただきます。先生、ゴメンナサイ）
要約すると、毎年、大学運営に関する年度計画を立て、それに基づいた大学運営を行い、年度が終了したら業務実績報告を作成して、県に報告するのが副理事長の主な仕事だそうです。また7年に1回、大学が健全に運営され、教育の質が保たれているか否かを第三者の目で検証する認証評価という調査を受けなければならないそうで、その報告書の作成や調査員への説明もされているとのことでした。

他の先生方と事務局職員の協力のおかげでなんとかやっているかと先生はおっしゃっていましたが、見せていただいた資料を作るのって、すごく大変そうですね。まさに書類の山って感じですが、それから、先生は副理事長のほかにも、図書館長や学校医もされていると伺いましたが…

はい、していますよ。例えば、学校医は、学生の健康診断の結果のチェックや奨学金を受給している学生の健康診断書の作成、体調不良学生の診察、必要時には病院への紹介状作成などが仕事です。保健指導員の先生3人と保健室保健師、そして臨床心理士と連携して学生の心身の健康をサポートしています。このための会議も月に1回しています。

なるほど～。大学内で具合が悪くなくても安心ですね。最後に、「社会貢献」ですが、先生はどんなことをされているんですか？

地方では産婦人科医が不足していますので、上越地域の子宮がん検診を時々頼まれます。また、地方の病院での診療を頼まれることもあります。地域貢献になるほか、他の医師と情報交換もできますので、時間の許す限りお手伝いしようと努めています。

大学の先生って、授業や実習などの「教育」、「研究」、「大学運営」、「社会貢献」など、思っていた以上にいろんなことをされているんですね。新たな境原先生の一面をお届けできたでしょうか。

**境原先生、いろいろお話しくださり、ありがとうございました。
次回は、あの先生の研究室におじゃまします。お楽しみに！**



学校医としてお仕事中の境原先生

学生活動報告
桜蓮祭



桜蓮祭実行委員長

初めに第18回桜蓮祭にご参加、ご協力していただいたすべての方に実行委員会を代表して感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

今年度は「麗和～華やかなはじまり～」というスローガンのもと桜蓮祭の企画、運営を行いました。今年は元号が「平成」から「令和」へと変わりました。「令和」には人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つという意味が込められています。元号の変化とともに、私たち学生も新たなスタートを切り、地域と心を寄せ合うという意味を込めてこのスローガンにしました。本学には様々なサークルや団体があり、日々熱心に活動に取り組ん

でいます。桜蓮祭ではその活動の成果を地域の皆様に発表させていただきました。看護系のサークルでは、学校生活で学んだ知識や技術を地域の方に還元できるように取り組みました。また、2年に1度開催されるMiss NCN Contestでは「麗和～華やかなはじまり～」を意識して準備、発表をしました。そのほかにも、よさこいサークルやダンスサークルによる活気あるステージによって、地域の皆様に元気を与えることができたのではないかと思います。また今年は、吉本興業さんからジョイマンさんとひよっこりはんさんに来ていただきました。地域の方も参加できるステージを用意していただき、桜蓮祭を盛り上げていただきました。

最後に、すがすがしい秋晴れの空のもと、たくさんの方に足を運んでいただき、素晴らしい桜蓮祭を行うことができましたことに改めて感謝いたします。誠にありがとうございました。

看護系大学タスクフォースの活動紹介



学生委員会委員長 大久保 明子

看護系大学タスクフォースは、「高等教育コンソーシアムにいがた」の部会の一つで、県内5つの看護系大学が参加しています。主に、看護系人材の確保、看護学生のキャリア形成支援、学生交流促進の活動を行っています。

今年度の活動として、2019年9月21日に新潟県スポーツ公園で開催された「リレーフォーライフジャパンにいがた」に本学の学生7名と教員2名を含む総勢34名で参加してきました。これは、がん患者さんやそのご家族を支援する目的で行われるチャリティイベントです。このイベントの参加にあたり、幹事校である本学の学生と教員が主体となって、学生交流や血圧測定ブースの企画をしました。

昼食をともにしながらの学生交流では、学生たちはすぐに打ち解け、仲

良く語り合う姿が見られました。「学年、学校に関わらず交流できてよかった」「他大学の人と交流し、交友関係が広がった」「看護について話を深めることができた」「実習について情報交換し、同じ看護師を目指す意識が高まった」との意見が聞かれました。

また、学生は患者さんやそのご家族の血圧測定や、ルミナリエと呼ばれる灯籠にがん患者さんへの応援メッセージを書きました。ルミナリエはリレーフォーキングのコース横に飾られており、がん患者さんやご家族が書かれたメッセージ一つひとつが心に響くものでした。学生たちは、がん患者さんやその家族の思いに触れ、看護師になるという思いを強くしているようでした。

令和元年度「地域課題研究発表会」の報告とお願い

看護研究交流センター長
小野 幸子

地域課題研究は、県内の保健・医療・福祉に関わる看護職の方々が公募(毎年10月～12月)によって本学教員を共同研究者に助成金を得、各々所属する場の看護実践上の課題に取り組むものです。したがって、今年度の発表会は、昨年度取り組まれたもので、表1に示していますように6組で、10月5日(土)10時～12時、第2ホールで68名の参加者を得て行われました。いずれの発表も昨年度より導入したポスターセッション形式で、予定時間を超過するほど活発な質疑応答、意見交換がなされ、引き続き残って参加者と討議される状況がみられました。終了後のアンケートでは8割以上の参加者より肯定的評価が得られましたが、事前の抄録配布の要望もありましたので、来年度は実現したいと考えております。また、今年度の発表者におかれましては、本発表会における意見などを反映するとともに、本学の地域課題研究として助成金を得て取り組んだことを明記して、公表して下さることを願っております。さらに、多くの看護職の皆様が各々の実践現場において、より良い看護実践に向けて、是非この地域課題研究に応募して頂き、本学教員と一緒に取り組んで下さいますようお願い申し上げます。

〈表1〉

演題名	研究代表者名(所属)	共同研究者名
慢性腎臓病保存期療養生活での患者の学び～血液透析導入後の患者の語りを通して～	松矢 春奈(新潟労災病院)	小林 綾子
心臓リハビリテーション外来に通院困難な急性冠症候群患者お退院後の生活状況	結城 真(長岡赤十字病院)	高柳 智子
整形外科病棟における術後せん妄対策の変化～術後せん妄アセスメントツールの活用を通して～	高橋 未来(新潟医療生活協同組合木戸病院)	石原 千晶
ケーススタディ研修における卒後2年目看護師の学びと気づき	小山 洋恵(県立中央病院)	高塚 麻由
産後の母親の精神状態とその背景の実態調査～エジンバラ産後うつ病質問票を用いて～	松枝 杏奈(上越総合病院)	中島 通子 西田 絵美 永吉 雅人
N市の短期入所者生活介護施設における長期利用者の実態と看護援助の課題	細道 奈穂子(一般社団法人新潟市医師会在宅医療推進室)	平澤 則子